

論語訛讀記

辻野匠 (TuZino Taqumi – famiglia personale)

2012 年 1 月 31 日

目次

1	はじめに	2
2	學而第一 3	2
3	學而第一 11	3
4	爲政第二 3	3
5	爲政第二 11	4
6	八佾第三 3	4
7	八佾第三 11	4
8	里仁第四 3	5
9	里仁第四 11	5
10	公冶長第五	5
11	公冶長第五 11	6
12	雍也第六 03	6
13	雍也第六 11	6
14	述而第七 3	7
15	述而第七 11	7
16	泰伯第八 11	7
17	泰伯第八 3	8

18	子罕第九 11	8
19	子罕第九 03	9
20	郷黨第十 03	9
21	郷黨第十 11	10
22	先進第十一 03	10
23	先進第十一 11	11
24	顔淵第十二	11
25	顔淵第十二	12
26	子路第十三	13
27	子路第十三	14

1 はじめに

論語の訛讀を記すことにしました。訛讀とあるやうに必ずしも、古典として正しい読み方をしてゐるわけではありません。

いつ終つてもそれなりに型がつくやうに、ランダムに紹介していきます。幸いなことに論語は各段落が方針をもって排列されたといふよりも、ランダムに排列したといふやうな構成で、どこから讀んでもそんなに違ひはありません。數學者のクヌースは聖書の各文章の第3章16段落を紹介し、それについてエッセイを述べました。一種の擬似ランダムサンプリングとして、この方法は使へるでせう。

ここでは、最初は0311、第3章11段落を目安に紹介していきます。

註

JIS96 で出ない漢字は {言己} などと代書してゐます。これは「記」です。震旦では「學而第一」のやうに、章題のあとに章の數字が出ます。

2 學而第一 3

0103 子曰、巧言令色、鮮矣仁。

【書き下し】子曰、/巧言令色/KouGenReiSyoku/、鮮きかな仁。鮮し仁、とも

【通釋】子がいふことには、言葉巧みで、外見を飾る(令色)ものには仁は少ない。

【訛讀】。讀んだまま。

3 學而第一 11

0111 子曰、父在觀其志、父沒觀其行、三年無改於父之道、可謂孝矣。

【書き下し】子曰く、父 /在/Ima/せば、その志を觀、父 沒すれば、その行ないを觀る。三年父の道を改むることなきは、孝と謂ふべし。

【通釋】「父がある場合は、その人の志から判断しよう。父が没してある場合は、その人の行ないから判断しよう。といっても、喪中の三年間、父の方針を改めなかった場合は、孝のためと解釋しよう」

【訛讀】ある人の人物を見ようと思っても、個々の人は家に屬しているのもその人の本性はわかりにくい。家の代表者である父の方針に反したことができないので、その人を知るにはその人の志から判断するしかない。もし、父が亡くなり、家の意志決定に關與している場合は、その人の行ないからその人の人物を見ることができる。といっても前代の習慣的になっている政策は急には變え得れない場合もある、孔子はこれを孝、親孝行のためと解釋している。

前半は、必ずしも個人の意志が行動として表われるわけではない場合とは何か紹介している。中段は、さういふいいわけが通用しない、責任ある立場について言及している。後半は、かういふことだらう。會社でもトップがわかるたびに、方針はまるつきり變更になることがしばしばであるが、末端の立場からすれば急激な改革はやめてもらいたい。結局、急激な改革といふものは先行者に對する敬意がないためではないかと思ふ。先人が正しいなんて思はないが、是非、先代への經緯から穩當な改革をしてもらいたい。先人に對して敬意 がない者は結局、後續から敬意をもたれず滅ぼされるわけだから。

4 爲政第二 3

0203 子曰、道之以政齊之以刑、民免而無恥。道之以德、齊之以禮。有恥且格。

【書き下し】子曰、これを/道/Mitibi/くに政を以ってし、これを/齊/Totono/ふるに刑を以ってすれば、民、免れて恥なし。これを道くに徳を以ってし、これを齊ふるに禮を以ってすれば、恥有りて且つ/格/tada/し。/格/ita/る、とも。

【通釋】政治主導と刑罰主義になると、民は、ごまかすことばかり考へて恥知らずになる。徳治主義と禮儀重視だと、恥を知り、品格が備わる。

【訛讀】道之以政は政治主導といふよりも規則主義かもしれない。法治主義ともいえる。後代、秦は孔子を嫌い、本を焼き、學者を生き埋めにしたが、その秦は法治主義を採用した。秦は短命で、それにとってかはった漢は法三章といって法律は3つだけにしたと傳へられる。といふのは秦は法治主義がいきすぎてなんでも規則規則、刑罰刑罰であったから。漢はその反省にたつて規則主義をゆるめた。秦の規則はバカみたいで、皇帝にウチワをあふぐ係の人が、皇帝の帽子を直すのは刑罰に處されるといふ話と呼ばれた。越權行爲だから。もつとも、混亂した大陸國家を支配するにはああいふ法治主義になるのは仕方のない面もある。

5 爲政第二 11

0211 子曰、溫故而知新可以爲師矣。

【書き下し】子曰、故/Huru/きを溫/Tadu/ねて新しきを知れば、以って師となるべかんや。

【通釋】古いことを掘り起して温めて、新しいことを(再)発見することができれば、人の師になれる。

溫故知新

6 八佾第三 3

0303 子曰、人而不仁、如禮何。人而不仁、如樂何。

【書き下し】子曰、人にして仁ならずんば、禮を如何/ikan/. 人にして仁ならずんば、樂を如何。

【通釋】人として仁でなければ、禮があってもどうしようもない。人として仁がなければ樂があってもどうしようもない。

【訛讀】如何は反語ととる。樂は音樂のことであるが、今日的な娛樂音樂のそれではなく、宗教音樂をイメージするとよい。祭禮の時に神に奉納する音樂のこと。カトリックの賛美歌、神道の雅樂、佛教の聲明やお經など宗教に音樂はつきもので、それぞれ位置付けは違うが、人に與える効果は同じようなものかもしれない。神(がゐるとして)との交流(した氣になること)により、人として幸福に生きられるといふことか。

なお孔子は「神を祭ること神在すが如く」といってをり、神そのものの存在には言及してゐない。「神がゐると假定して、神がゐるように祭らなければならぬ」といふのが孔子の立場。

7 八佾第三 11

0311 或問禘之說。子曰、不知也。知其說者之於天下也 其如示諸斯乎 指其掌。

【書き下し】或る人、/禘/tei/の說を問ふ。子曰、知らざる也。その說を知る者の天下におけるや、それ、/諸/kore/を/斯/koko/に示すが如きか、と。その掌を指せり。

【通釋】禘は祖先の祭禮。孔子は祖先の供養?をちゃんとすべきだと常々、主張してゐたが、その孔子にしても靈祭の意義を知つてゐたわけではない。續けて云ふには、靈祭の意義を知つてゐるなら、天下のことも手のひらを見るようにわかるだろうよ。

【訛讀】誤讀すれば、祭禮の意義なんてわかりっこない。意義がわかつて祭祀を行つてゐるのではない、ということにならう。祭禮をはじめ習慣にはわからないことがあるが、それをわかるということは世の中すべてのことを自分の手のひらのやうにわかる必要がある。習慣を破壊する合理主義が孔子の時代にはさかんだつたがそれへの批判と 誤讀する(笑)。

【漢字】佾は祭禮の踊り

8 里仁第四 3

0403 子曰、惟仁者能好人、能惡人。

【書き下し】子曰、/惟/ta/だ仁者のみ/能/yo/く人を好み、能く人を/惡/niku/む。

【通釋】仁者のみが人を愛することができ、憎むこともできる。

【訛讀】仁者が私心がないから本當に人を愛し憎むことができるのだと古來の註にある。仁者でないものは、人を愛してゐるわけではなく、相手に映った自分を愛してゐるにすぎないわけで、憎むといふのこれと同じで、相手を憎んでゐるのではなく相手に映った自分を憎んでゐるというのであろうか。これは長老佛敎的解釋。まさしく訛讀。

9 里仁第四 11

0411 子曰、君子懷德、小人懷土。君子懷刑、小人懷惠。

【書き下し】子曰、君子は徳を/懷/omo/ひ、小人は土/do/を懷ふ。君子は刑を懷ひ、小人は恵を懷ふ。

【通釋】君子は道德を思ふが、小人は土地を思ふ。君子は法則を思ふが、小人は恩恵を思ふ。あるいは、統治者が道德を思へば、民は土地に親しむやうになる。統治者が刑罰を思ふと、民はお情け頂戴といふやうになる。

【訛讀】傳統的には前者の解釋だが、荻生徂徠は後者の解釋をとった。原文はかなり意味がとりにくい。前者の解釋であれば、君子が刑罰を思ふのは孔子の考へ方に反してゐるので、解釋に無理がある。君子を統治者の意味と考へると、本文は君子の行動がどうかについての對比の構文になるので後者になる。が、それだと、君子とは「理想的」統治者としてきた傳統的な意味に反する。ここでは後者をとる。君子の用例はいくつかある(ざっと58例)が、「君子仁を去りて(0405)」「君子にして不仁なるものあり(1407)」と理想的でない君子の例も若干だけあることから、後者の例は可能である。

大意としては統治者は道德に心掛けるべきで、そうすれば民衆は土地に親しむ(この時代、流民が問題になってゐた)。逆に、統治者は刑罰に熱心になると民はお目こぼしを欲しがることになる。

10 公冶長第五

0503 子謂子賤、君子哉若人、魯無君子者、斯焉取斯。

【書き下し】子、子賤を謂はく、君子なるかな、かくの/若/goto/き人。魯に君子なかりせば、/斯/ko/れ焉/idu/くにか斯れを取らん。

【通釋】子は子賤を評していった。子賤は君子である。魯(當時の國のひとつ)に君子がゐなかったとしたら、子賤もどうやって君子の道を歩むことができただらう。

【訛讀】君子の道は君子を通じて繼承される。反面教師といふ言葉もあるが、ダメな見本ばかりでは何がダメなのかはわかるが、なにが芳いのかについてはわからない。ダメの反對が單純に芳いにはならない。ダメの反對はもっと別のダメかもしれない。

11 公冶長第五 11

0511 子曰、吾未見剛者、或對曰申枨、子曰、木長也慾、焉得剛。

【書き下し】子曰、われはいまだ剛なる者を見ず。あるひと/對/Kota/へて曰く、/申枨/SinTou/あり、と。子曰、木長や慾あり。いづくんぞ剛なるを得ん。

【通釋】子曰、私はいまだ勇者を見たことがない。ある人が答へて言った。申枨という人がゐます。子曰、木長は欲がある、どうして勇氣があるといへよう。

【訛讀】欲がある人は勇者にはなれない、という話。

12 雍也第六 03

0603 哀公問曰、弟子孰爲好學。孔子對曰、有顔回。好學、不遷怒、不貳過、不幸短命死矣。今也則亡、未聞好學者也。

【書き下し】哀公問ふ、弟子、/孰/Dare/か學を好むと爲す。孔子/對/Kota/へて曰く、顔回なる者あり。學を好み、怒りを/遷/Utu/さず、/過/Ayama/ちを/貳/Huta/たびせず。不幸、短命にして死せり。今や則ち/亡/Na/し。未だ學を好む者を聞かざるなり。

【通釋】哀公(王の名)が「弟子の中で誰が學問好きですか」と訊ねた。孔子は答へて云ふには、「顔回といふ者がをりました。學問好きで、怒りに飲まれることなく、過ちを繰り返しませんでした。不幸にして短命で死んでしまって、今はをりません。以來、學問好きといへる者は聞いたことがありません」

【訛讀】孔子がもっともかはいがってゐた顔回を悼む言葉。顔回が死んだとき、孔子は「天ハ我ヲホロボセリ」を絶叫してゐる。

13 雍也第六 11

0611 子曰、賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回也不改其樂、賢哉回也。

【書き下し】子曰、賢なるかな回や。一/簞/Tan/の/食/Si/, 一/瓢/Byou/の飲、/陋巷/RouKou/に在り。人はその憂いに堪へず、回やその楽しみを改めず。賢なるかな回や。

【通釋】子曰、「回は偉い。ご飯一杯とお椀一杯の飲み物で路地裏に住んでゐる。普通の人ならその辛さに堪へられないが、回はそこでも自分の楽しみをもちつづけてゐる。回はほんとうに偉いです」

【訛讀】0603と同じく、孔子がもっともかはいがってゐた顔回を賞讃する言葉。顔回が貧困の中で自分の幸福を保ちながら没したのは本人にとっては幸せだっただらうが、孔子にとっては悲痛であつたらう。

14 述而第七 3

0703 子曰、徳之不脩也。學之不講也。聞義不能徙也、不善不能改也、是吾憂也。

【書き下し】子曰、徳の/脩/Osa/めざる、學の講ぜざる、義を聞きて/徙/Utu/る/能/Ata/はざる、不善の改むる能わざる、是れ吾が憂いなり。

【通釋】子曰、「道德を修めない、學問を習はない、正義を知りながら実行に移せない、善くないのに改められない、これが私の心配事だ」

【訛讀】特に解説を要しない。前2者は、實行しないことに對して憂いてゐるのに對して、後2者は、能力がないことを憂っている。前者は、自分がその氣になればできることであるが、後者は、意欲があつてもできないことがある。意欲があるのは當然だが、實行できなければしゃあない。このことを憂いてゐる。

15 述而第七 11

0711 子曰、富而可求也、雖執鞭之士、吾亦爲之。如不可求、從吾所好。

【書き下し】子曰、富にして求むべくんば、/執鞭/SituBen/の士と/雖/Ihedo/も、吾れ/亦/Ma/たこれを爲さん。/如/Mo/し求むべからずんば、吾が好む所に從はん。

【通釋】子曰、「富というものが徳に則た上で求めて得られるものなら、鞭打ち係になつても富を求めよう。そうでなら、私の好きな生き方にしたがはう」

【訛讀】/執鞭/SituBen/の士とはある説では鞭打ちして露拂いする係とされ、賤業とされるが、「士」とあるので、それなりの階級のものであらう。一方で、御者とする説もあるが、こちらのはうが妥當である。

孔子は清貧を尊しとしてゐたわけではない。孔子の「現場」はあくまで社會であり、世捨て人のやうに「現場」を捨てて正しく生きるということは孔子はよくないと考へてみた(それでは、個人はそれでいいかもしれないが、社會は一向によくならないからである)。孔子の目標はあくまで社會の中で正しく生きていくこと、社會を正しく導くことであつた。そのため富を求めることもまったく否定してゐない。しかし、目標に沿つた上でのこと、徳に則つた上でのことであり、富それ自信を目的とすることには反對であつた。

16 泰伯第八 11

0811 子曰。如有周公之才之美。使驕且吝。其餘不足觀也已矣。

【書き下し】子曰、もし周公の才の美あるも、驕りかつ/吝/Yabusa/かならしめば、その/餘/Yo/は觀るに足らざるのみ(なり、とも)。

【通釋】子曰、「たとへ周公(古代の聖王の一人)ほどの立派な才能があつたとしても、傲慢かつケチであるなら、それ以外にその人がどれだけの才能をもつてゐるかなど觀るに値しない」

【訛讀】會社など組織では、才能はあるけれど人間性に問題のある人物をどうするかといふことがよく話題になる。孔子はこういう事例に對しては、才能よりも、謙虚さと寛容

さを重視してゐる。謙虚さと寛容さがなければ才能があるからといって、その人物を取り立ててはいけなないと主張してゐる。その理由はおそらくかういふことであらう。才能はご本人の技術的な能力(思考力など)の所以であるが、才能を開花させ発展させるのは、謙虚さと寛容さである。謙虚さと寛容さがなければいづれ失速するか暴走する。

これは日本の社会で、よく受けいれられてゐる考へ方である。ある意味、孔子の理想とする社会は日本に成立してゐるといへる。日本では、どんなに才能があるものであつても傲慢であれば非常にバッシングされておちつぶれてしまふ、あるいはおちつぶされる。

さういふ日本人のありかたは問題であるが、日本のやうに狭い社会では、御互いに密接に關係してをり、自己責任といふことが成立しにくい。自己責任ではないということは、手柄も自分の所爲ではない。自分の手柄ではないのに、どうして傲慢になれよう、といふことなのか。

謙虚ときいて今思ひ出したのは、舊約聖書の、ある人が神に文句をいったときに、神の言葉、「私が世界をつくったとき、おまえはどこにいたのか」と新約聖書の「天を指してものをいってはならない。それは天の御座/miza/であるからである。

あなたは自分の髪の毛一本自分の意思で黒くすることも白くすることもできない」である。これは調べずに記憶にしたがって書いてゐるから私の心の中で曲解しているかもしれない。

17 泰伯第八 3

0803 曾子有疾。召門弟子曰、啓豫足。啓豫手。詩云、戰戰兢兢。如臨深淵。如履薄冰、而今而後、吾知免夫、小子。

【書き下し】曾子、疾/Yamahi/あり。門弟、子を/召/yo/びて曰く、/豫/Wa/が足を/啓/Hira/け、豫が手を啓け。詩に云ふ、戰戰兢兢として、深淵に臨むが如く。薄氷を/履/Hu/むが如しと。/而今/Ima/よりして後、吾れ/免/Manuga/るることを知るかな、小子。

【通釋】曾子が病氣なつた。門弟を呼んで言つたことには「わが足を見よ。わが手を見よ。詩經には『恐れつつ戒めつつ、深き淵に臨むごとく、薄き氷をふむがごとし』とあるが、これから先、私はもうその心配が無い。君たち」

【訛讀】戰々恐々、薄氷を踏む慎重さなどの故事成語がある。「身體髮膚これを父母に受くあえて毀傷せざるは孝の始めなり」と孝經にある。親にもらつた身體をいたづらに傷つけてるのは親不孝であるの意。曾子は死病に臨んで、自分がそのやうな親不孝をしないで済んだことを弟子とともに喜んだ。子供が身體を傷つけることなく、日々健康にすごし、やすらかな最期を迎へることは親の願ひである。

18 子罕第九 11

0911 顔淵喟然歎曰、仰之彌高。鑽之彌豎。瞻之在前、忽焉在後。夫子循循善誘人、博我以文、約我以禮。欲罷不能、既竭吾才。如有所立卓爾。雖欲從之、末由也已、

【書き下し】顔淵、/喟然/KiZen/として歎じて曰はく、これを仰げば/彌々/IyoIyo/高く、これを/鑽/Ki/れば彌々豎し。これを/瞻/Mi/るに前に在れば、/忽焉/KotuEn/として/後/Sirihe/に在り。夫子、/循々然/ZyunZyunZen/として善く人を/誘/Izana/ふ。我れを/博/Hiro/むるに文を以てし、我れを約するに禮を以てす。/罷/Ya/まんと欲するも能はず、既に吾が才を/竭/Tu/くす。立つ所ありて/卓爾/TakuZi/たるが如し。これに従はんと欲すと雖ども、/由/Yosi/なきのみ。

【通釋】顔淵(弟子のひとり。顔回)がああと感歎して言った。「仰げば仰ぐほどいよいよ高く、切り込めば切り込むほどいよいよ豎い。前方に認められたかと思うと、不意にまた、後ろにある。うちの先生(夫子)は順序よく巧みに人を導かれ、書物で私を廣め、禮で私を引き締めて下さる。やめようと思ってもやめられない。もはや私の才能を出し盡くしているのだが、まるで足場があつて高々と立たれているかのようで、着いて行きたいと思つても手立てがないのだ」

【訛讀】「先生はすごい」といふ意。まる暗記すれば、なにかの會(「ナニナニ先生退官記念パーティ」など)で人をほめる必要がある時に使へるかも。

19 子罕第九 03

0903 子曰、麻冕禮也。今也純、儉。吾從衆。拜下禮也。今拜乎上、泰也。雖違衆、吾從下。

【書き下し】子曰、/麻冕/MaBen/は禮なり。今や/純/Kuro/し、儉なり。われは衆に従はん。/下/Simo/に拜するは禮なり。今や/上/Kami/に拜す、泰なり。衆に/違/Taga/ふといへども、われは下にてするに従はん。

【通釋】子曰、「[禮服としては]麻の冕(冠)が禮である。最近の人が絹糸にしているのは儉約だ。[そこで]私も皆に従おう。[主君に招かれた時]堂の下に降りてお辭儀をするのが禮である。最近の人が上でお辭儀をしているのは傲慢だ。[そこで]皆とは違つても、私は下の方にしよう」

【訛讀】是是非非といふことであらう。賛成するところは賛成する。反對するところは反對する。單純な守舊派でもないし、單純な改革論者でもない。

ちなみにこの時代は麻よりも絹のほうが儉約になってゐたといふのは驚きである。

20 鄉黨第十 03

1003 君召使擯。色勃如也。躩足如也。揖所與立。左右手。衣前後。檐如也。趨進。翼如也。賓退。必復命。曰。賓不顧矣。

【書き下し】/君/Kimi/、/召/Me/して/擯/Hin/せしむれば、色、/勃如/BotuZyo/たり。足、/躩如/KakuZyo/たり。/與/Tomo/に立つ所に揖/Yuu/するには、手を左右にし、/衣/Koromo/の前後は/檐如/SenZyo/たり。/趨/Hasi/り進むには/翼如/YokuZyo/たり。/賓/Hin/、退けば必ず復命して曰く、賓、/顧/Kaheri/みずなりぬ。

【通釋】主君のお召しで客の接待役を命じられたときは、顔つきは緊張され、足取りはそろそろとされた。一緒に〔接待役として〕竝んでいる人々に會釋されるときは、その手を右の方に組まれたり、左の方に組まれたりして、〔腰を屈めるたびに〕着物の前後が美しく揺れ動いた。小走りに進まれるときはきちんと立派であった。客が退出すると、必ずまた報告して「お客様は振り返りませんでした〔満足して歸られた。〕」と言われた。

【訛讀】客に對する禮法を述べてゐる。「おもてなし」の心である。禮法をいちいち書くのは禮法が廢れつつあることの證左である(孔子の時代にはほぼ完全に全滅の危機であった)。私は實踐できてゐるかどうかはともかく理論的にはあたり前すぎて心に響かなかつた。日本人は論語を讀まなくなつて久しいが、日本人一般にはたぶん、いまだにこの心延えは根づいてゐる。が、さういふことも、なんらかの教育や文化的メッセージによって reinforce していかないと廢れてしまふものかもしれない。その一段前には「與下大夫言。侃侃如也。與上大夫言。誾誾如也。」とあり下のものには柔やかに、上のものには慎しみ深く接したといふ。

21 郷黨第十 11

1011 問人於他邦、再拜而送之。

【書き下し】人を/他邦/TaHou/に問えば、/再拜/SaiHai/してこれを送る。

【通釋】他國に人をやつて友人を訪ねさせるときは、その使者を再拜してから送り出す。

【訛讀】むかしは他國(といつても 50 キロ離れた(今日的には)隣町だったりするが)に行くのは大變だつた。物理的に行くのが大變だといふもあるし、言葉が通じないといふのもあるし、政治的に移動制限がある場合がある。自分は他國にいけないから、人を遣はして友人を訪ねさせるわけである。遣はす人は、私にとっては友人の代理であり、友人にとっては私の代理となる。だから、再拜していくのが禮である。このやうな禮の背景には、一期一會といふことと、代理にも禮が及ぶといふことがあるのかもしれない。

22 先進第十一 03

1103 德行顔淵閔子騫冉伯牛仲弓、言語宰我子貢、政事冉有季路、文學子游子夏、

【書き下し】/德行/TokuKou/には顔淵、/閔子騫/BinSiKen/、/冉伯牛/ZenHakuGiu/、仲弓、言語には/宰我/さいが/、子貢、政事には冉有、季路、文學には子游、子夏。

【通釋】德行では顔淵と閔子騫と冉伯牛と仲弓。言語では宰我と子貢。政事では冉有と季路。文學では子游と子夏。

【訛讀】つまり、弟子のうちで得意分野を列記してゐる。これだけ見せられても、だから何？ といふのはあるだらう。前後の文脈を見ると、前後の段落は「子曰…」で始まつてゐるが、この段落は違ふ。しかも、弟子の名指しが、字(あざな、呼び名)で呼んでゐるので、

この段落は孔子の發言ではない。孔子なら、字で呼ばずに、顔回(顔淵)なら、「回」と呼ぶ。おそらく、後世(といつても比較的早い段階)の注釋が本文に入ってしまったのでは

ないか、といふのは私の憶測である。しかし、さう思ふと見えてくるものがある。直前の段落では、孔子が「昔の弟子はみなみなくなってしまった」と昔を懐しくも、

さみしく想ひ起こす記述がある。おそらくは、その「昔の弟子」といふのが誰か、彼らがどういふ人たちであったのか、のを注釋でおぎなつたのであらう。

23 先進第十一 11

1111 顔淵死、門人欲厚葬之、子曰、不可、門人厚葬之、子曰、回也視豫猶父也、
豫不得視猶子也、非我也、夫二三子也、

【書き下し】顔淵死す。門人厚くこれを葬らんと欲す。子の曰く、不可なり。門人厚くこれを葬る。子の曰く、回や、/豫/Wa/れを視ること/猶/Na/ほ父のごとし。

豫れは視ること猶ほ子のごとくすることを得ず。我れに非ざるなり、/夫/Ka/の二三子なり。

先生は、「いけない」と言われたが、門人達は立派に葬った。先生は言われた、「回は私を父のように思ってくれたのに、私は子のようにしてやれなかった。私 [のしたこと] ではないのだ、あの諸君なのだ。」

【訛讀】顔淵(顔回)は孔子の一番弟子といってもよい高弟で、孔子はとても愛してゐた。その顔回が死んだ時、孔子は「天はわれを滅ぼしたり、天はわれを滅ぼしたり」(11 先進 09)と嘆いた。自分の子供に匹敵するくらゐの思ひ鑄れがあつたのだらう。が、その孔子にしても厚葬はするべきではないと考えてゐた。禮法では、身分によって葬禮の厚さに差があり、身分が高い人ほど葬禮が厚くなる。顔回は、孔子と同じく身分は上(士大夫)の下だから、薄葬が妥當であり、孔子の子(鯉)は早世したが、薄葬だった。孔子は禮法により薄葬にした。ふたつ前の段落では、鯉の時の葬儀の様子が記されてゐる。顔回のときは、門人つまり夫の二三子といふ孔子の門人かあるいは顔回の門人によって厚葬になつてしまつた。孔子はそれを悔んでゐるだけである。

かう書くと、孔子は薄情なのか、と思つてしまふが、さうではない。ひとつ前の段落では、顔回をいかに愛してゐたか、「かの人のために慟哭するにあらずして、/誰/Ta/がために慟哭せん」とまで云つてゐる。顔回の死は「われを滅ぼしたり」なのである。

なぜそこまで禮法に拘泥するのか理解しがたいかもしれない。しかし、禮法を越えて葬禮すると、人間には一貫性の法則があるから、どこまでも葬禮だけに没頭することになり、健全な社會生活をおくれなくなつてしまふ。一線を越えないための禮法なのであらう。

24 顔淵第十二

1203 司馬牛問仁、子曰、仁者其言也^{ジン*}、曰、其言也/認/Zin/、斯可謂之仁已乎、子曰、爲之難、言之得無/認/Zin/乎、

【書き下し】/司馬牛/SiBaGiu/、仁を問ふ。子の曰く、仁者は其の言や/認/Zin/。曰く、其の言や/認/Zin/、斯れこれを仁と謂ふべきか。子の曰く、これを爲すこと難たし。これを言ふにジンなること無きを得んや。

【通釋】司馬牛が仁のことをお訊ねした。先生は言はれた、「仁の人はその言葉が控えめだ。」「その言葉が控えめなら、それで仁と言って宜しいでしょうか。」先生は言はれた、「實踐が難しい[と思へば]、もの言うことも控えないでおれようか。[そこが大切なところだ]」

【訛讀】なんていふのかな、仁がなにかっていふのは第一近似的には言及することができる。たとへば「言葉が控えめなことだ」と言及することができる。かといって、「控えめだったら仁だ」とは云へない。かう云ってしまふと必要条件と十分条件の違いみたいになってしまふけれど、「仁」といふものを定義するのに必要な条件あるいは十分な条件といふのあるわけではない。個々の事例において、ああだ、こうだと云っていくしかない。個々の事例において、理由を、たとへば「實踐が難しいから控えめになるしかない」といふと、これを演繹して、「仁」一般についての言及を得ることはできない。

さて本題に戻ると、仁者は其の言や/諛/Zin/. 當世、言い切るのがカッコいいと思はれてゐるが、物事をわかればわかる程、言い切るのはむづかしいものだ。なにか言はうとしても、

さうでない例外にも心がいたり、知ってゐることの不確實性に気がつき、不完全な前提を危なっかしく思い、あまり齒切れよい発言はできない。相手がそれをどう理解するのかもわからない。それでも言ひ切るのは勢い、バカか、事實に対する誠實さがまったく缺如してゐるか、その中では勢い以外は、ホメられたものではない。(私は言ひ切る人間をあまり信用できない)

25 顔淵第十二

1211 齊景公問政於孔子、孔子對曰、君君。臣臣、父父、子子、公曰、善哉、信如君不君、臣不臣、父不父、子不子、雖有粟、吾豈得而食諸、

【書き下し】齊の景公、政を孔子に問う。孔子對へて曰く、君 君たり、臣 臣たり、父 父たり、子 子たり。公の曰く、善きかな。信(まこと)に如(も)し君 君たらず、臣 臣たらず、父 父たらず、子 子たらずんば、/粟/Zoku/ありと雖ども、吾れ豈に得て諸(こ)れを食らわんや。

【通釋】齊の景公が孔子に政治のことをお訊ねになった。孔子がお答えして言われた、「君は君として、臣は臣として、父は父として、子は子としてあることです。」公は言われた、「善いことだね。本當にもし君が君でなく、臣が臣でなく、父が父でなく、子が子でないようなら、米があつたところで、私はどうしてそれを食べることができようか」

【訛讀】有名な文言である。後世、日本では、「君君たらずとも臣臣たれ」(上がバカ(ならまだマシかも。ゴクアク)でも、下はマジメにやれ)と曲解されて傳はつてゐる。公共正義の考へからすれば、非對稱な關係は長つづきせず、兩方とも破綻「君は君たらず、臣は臣たらず」の無法状態になってしまうことは必定である。孔子はともかくも、そんなことは云つてゐない。

それはさうとして、孔子がここで述べてゐることを逐語的に理解すると、「それぞれが、それぞれのなすべきことをすること」である。私見では、上がどうだから、自分がかうする、といふ考へ方、つまり、上がヒドいから自分もヒドくしていい、上がマトモだから、自分もマトモにしよう、といふのは、ドレイのコンジョーである。

では、上がヒドいならどうすればいいのか、「君君たらず」つまり亂君だからといって、亂臣になる必要はない。亂臣は「臣は臣たらず」であるが、なにも亂臣だけが「臣は臣たらず」ではない。孔子が云ふのは、立ち去りの美學だ。古風な言い方をすれな、お暇を頂戴すればいい、あるいは出奔か。人間はいつでも立ち去る権利はもつ。亂君の下で、忠臣を強制される義理はない。

一方で、「君君たらずとも臣臣たれ」として、當座の混亂を乗り切ることも社会的には要請される。一概に否定はしないが、君が「君たらず」といふ自覺がないのであれば付け焼刃は長つづきしないであらう。したがって、「君君たらずとも臣臣たれ」といふ社會は、逆に、君に君のあり方を繼續的に教育するシステムが必要にならう。勿論それは、君が自分でするわけでないから、臣の仕事である。

26 子路第十三

1303 子路曰、衛君待子而爲政、子將奚先、子曰、必也正名乎、子路曰、有是哉、子之迂也、奚其正、子曰、野哉由也、君子於其所不知、蓋闕如也、名不正則言不順、言不順則事不成、事不成則禮樂不興、禮樂不興則刑罰不中、刑罰不中則民無所措手足、故君子名之必可言也、言之必可行也、君子於其言、無所苟而已矣、

【書き下し】子路曰く、衛の君、子を待ちて政を爲さば、子將に/奚/Nani/をか先にせん。子曰く、必ずや名を正さんか。子路曰く、是れ有るかな、子の/迂/U/なるや。/奚/Nan/ぞ其れ正さん。子の曰く、/野/Ya/なるかな、由や。君子は其の知らざる所に於ては、/蓋闕如/KatuKetuZyo/たり。名正しからざれば則ち言/順/Sitaga/はず、言順はざれば則ち事成らず、事成らざれば則ち禮樂興らず、禮樂興らざれば則ち刑罰/中/Ata/らず、刑罰中らざれば則ち民手足を/措/O/く所なし。故に君子はこれに名づくれば必ず言うべきなり。これを言へば必ず行ふべきなり。君子、其の言に於て、/苟/Iyasi/くもする所なきのみ。

【通釋】子路が言った、「衛の殿様が先生をお迎えして政治をなされることになれば、先生は何から先になさいますか。」先生は言われた、「せめては名を正すことだね。」子路は言った、「これですからね、先生の回り遠さは。[この急場にそんなものを] どうしてまた正すのですか。」先生は言はれた、「がさつだね、由は。君子は自分の分からないことでは黙っているものだ。名が正しくなければ言葉も順當でなく、言葉が順當でなければ仕事も出来上がらず、仕事が出来上がらなければ、禮儀や音樂も盛んにならず、儀禮や音樂が盛んでなければ、刑罰もぴったりゆかず、刑罰がぴったりとゆかなければ人民は[不安で]手足の置き所もなくなる。だから君子は名をつけたら、きつと言葉で言えるし、言葉で言ったらきつと實行出来るようにする。君子は自分の言葉については決していいかげんにしないものだよ。」

【訛讀】これは私の好きな文言で、これについて話出すといくらでも書くことができるが、ここは簡潔に述べる。

人間は言葉をごまかすことで、事實をごまかそうとする。これは私の人間觀察によれば、その人が善人か悪人かとはまったく關係ない。人間に内在する根本的な愚かしさに起因し、自分が見たくない事實に直面すれば、ほとんど反射的に、言葉で繕はうとする。あるいはごまかす。しかし、言葉でごまかせるのは、その人の事實認識(なにが事實か、に對する

認識)であって、事実そのものではない。薔薇はどんな名前でも薔薇である。尻尾を足と呼ぶことにしたところで、犬は5本足にはならない。しかし、事実を改善することは大變な努力を伴うことがある。そもそもその事実を事実を認めることもイヤだ。事実を改善するより、言葉を飾るほうがずっと樂だ。だから、人は事実にとりくむよりも、言葉をいじくることに熱中しがちだ。しかし、そこは落とし穴だ。われわれは言葉で「らしく」誤魔化すことがうまく行くと、本當に事実を改善するにはどうしたらよいかをもはや考へなくなってしまうのだ。

結局、事実から遊離する。

27 子路第十三

1311 子曰。善人爲邦百年。亦可以勝殘去殺矣。誠哉是言也。

【書き下し】子曰く、善人、/邦/Kuni/を/爲/Osa/むること百年ならば、またもって/殘/Zan/に勝ち、/殺/Satu/を去るべし、と。誠なるかな、この/言/Gen/や。

【通釋】子曰く「ただの善人でも百年も國を治めていれば、暴れ者をおさえて死刑も無くすることが出来るという。この/言/Koto/は本當だよ。」

【訛讀】ここでいふ善人はホメて云ってゐるのではない。「ただの」と修飾語を振ったやうに、ここでは聖人に對して善人であるだけが取り柄の人みたいな、制限された意味だと、數々の注釋書はいふ。ここでは取り上げないが、前後の段落を見ると確かに、さうなつてゐる。

「善人であるだけが取り柄」—今日、善人であるだけでも難しい。それは孔子の生きた春秋でも然りであるが、孔子が求めてゐるのは、單なる善人ではなく、思慮深い大人である。子供は善人になれるかもしれないが、大人ではない(もちろん、大人だからといって思慮深い大人かどうかは別問題である)。

善人は確かに善であるが、惡があつたとき直視することを避けがちだ。思慮深い大人はさうではない。善も惡も深い理解をし、酸いも甘いも噛み締め、更にあるもの(それは徳とも眞善美とも聖ともいはれる、あるもの)を志す生き方が孔子のいふ聖人の道である。

善人の説明が長くなつてしまった。前後の文脈の中で、この文言を味はうこともできるが、ここは善人の限界と消極的に捉へるよりも、「善政百年にして惡人去る」と肯定的に捉へたい。人々の生活が安定して100年も経過すれば、人々の氣性も丸くなる。歴史時代の日本人を見ると亂暴すぎて同じ日本人とは思へないことがある(もちろん、さうでない時代もあるし、さうでない日本人もある)。われわれは折角手に入れた、善性を大事に「善人爲邦」を展開していくべきであらう。それは孔子の、半ば理想であるからといふよりも人類にとって貴重だからだ。